郷土“ひがしなり”の歴史

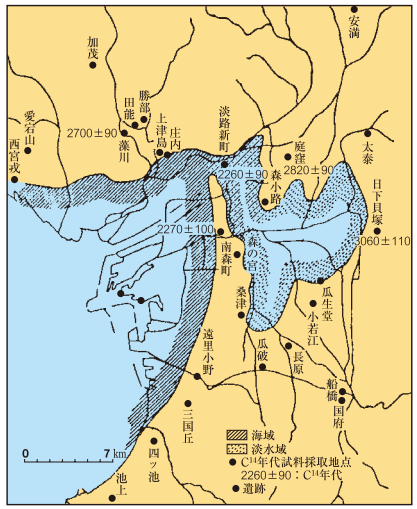
現在の東成区は大阪市内で２番目に小さい区ですが、大正 14 年（1925）旧東成郡が東成区として大阪市に合併された時は、旭区・都島区・城東区・鶴見区・生野区もその中に含まれる大きな区でした。しかも、この地域は地理的にも歴史的にも大阪の発展と大きなかかわりを持ち続けてきたため、区内のいたるところに古い歴史と文化を物語る遺跡や文化財や習俗が残されています。

原始・古代

今から２～3000 年前の大阪は、下の地理図のように大阪湾へ指のように突き出した半島状の地形で、**森の宮から東は大きな入江**となっていました。この入江に向かって淀川と大和川の２大水系が上流から土砂を運び、半島の東側に次第に陸地が広がって行きます。**半島（上町台地）の東側に生まれた**土地であるから**東生**と呼ばれ、それが東成の地名の始まりとなっています。

それでも古墳時代の末ごろまでは、大今里あたりは入江であったことが昭和 30 年に大今里西１丁目で杭に繋がれた状態の丸太舟が発見されたことから知られます。

飛鳥時代に入ると日本と大陸・朝鮮半島の交流が盛んになってきます。昭和 45 年町名変更が施行される以前、ＪＲ玉造駅の南側に「唐居町」という町名があって、ここは飛鳥～奈良時代の外交施設である三韓館（一種の迎賓館）が置かれた場所であり、日本の大陸に対する**大事な玄関口**であったとされています。（東小橋１丁目 19 番に碑あり）



河内湾の時代（約3000～2000年前・縄文時代晩期～弥生時代前半）の古地理図

東成の土地は次第に東へ広がり、多くの人々によって開拓が進みましたが、ここに流れこむ水の出口は半島のずっと北の方にある狭い水路だけでしたので低湿地はしばしば**洪水に見舞われて**いました。そこで５世紀の仁徳天皇の時代に上町台地に大がかりな**放水路が開かれ**、平野部にもある程度安定した土地が生み出されました。この放水路（難波堀江）が**現在の大川**であるとされています。

こうした土木工事は、**大陸や朝鮮半島の進んだ技術の助け**を借りて行われたと思われますが、上町台地東側の東成の地はこうした人々の拠点であり、日本で最も進んだ**文化・技術交流の先進地帯**であったのです。東小橋３丁目の比売許曽神社の祭神が新羅の王子の妻であったとされる下照比売（姫）命であることも、当時のこの地域に**朝鮮半島からの渡来人が多く集まっていた**ことを物語っているのではないでしょうか。

上町台地とその東と西に広がった土地は古くは難波と呼ばれ、東部を難波大郡、西部を難波小郡と称されていましたが、奈良時代の和銅６年（713）の新しい郡郷の制度により、難波大郡が**東生郡**に、難波小郡が西成郡に改められ、このとき以来東生（東成）の地名が現在まで続くことになります。東成とは実に **1300 年もの歴史がある由緒ある地名**なのです。

コラム

くじらの化石を発見

地下鉄今里駅周辺の工事中に、クジラの骨が発見されました。現在は大阪市立自然史博物館に展示されています。